

松江市文化財調査報告書 第60集



向山1号墳発掘調査報告書Ⅰ

1995年3月

松江市教育委員会
財松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書 第60集



向山1号墳発掘調査報告書Ⅰ

1995年3月

松江市教育委員会
財松江市教育文化振興事業団



石堵式石室全景（東南より）

例　　言

1. 本書は平成6年度において実施した個人住宅建築予定地にかかる向山1号墳の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査事業は松江市教育委員会が国、県の補助金を得て行った。現地調査は松江市教育委員会が財団法人松江市教育文化振興事業団に委託して実施した。
3. 調査の組織は下記のとおりである。

主体者　松江市教育委員会
事務局 教育長　諏訪 秀富
生涯学習部長　中西 宏次
文化課長　中林 俊
文化財係長　岡崎雄二郎
同係主事　古藤 博昭
同係主事　昌子 寛光
同係嘱託　落合 昭久
実施者　財団法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課
理事長　大塚 雄史
事務局長　佐藤千代光
調査係長　中尾 秀信
調査者　調査担当者　金山 正樹

4. 調査の実施にあたっては、次の方々の協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

島根大学名誉教授　山本 清
島根大学教授　渡辺 貞幸
島根県教育庁文化課文化財保護係
文化財保護主事　広江 耕史
土地所有者　勝部 武夫
隣接地所有者　吉野 光徳
タ　中島 茂

5. 本書で使用した遺跡の地形図及び遺構の実測図の方針は磁北を示す。
6. 出土遺物はすべて松江市教育委員会で保管している。
7. 本書の執筆は、I・IIについては古藤が、III・IVについては金山がそれぞれ分担して行い、編集は、金山の協力を得て古藤が行った。
8. 出土遺物の実測は金山が、江川幸子（同埋蔵文化財課調査員）及び市文化課嘱託員荻野哲二氏の協力を得て行い、写真撮影は金山が行った。

文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会(現文化庁)が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である斗拱、すなわち斗と拱の組み合わせによって全体で軒を支える腕木の役をなす軒物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していくこうというものです。



文化財愛護
シンボルマーク

目 次

I. 調査に至る経緯	1
II. 位置と歴史的環境	1
III. 調査の概要	3
1) 墳丘について	4
2) 主体部について	4
3) 出土遺物について	9
IV. 結 び	15



第1図 向山1号墳位置図

I. 調査に至る経緯

昭和45年に、当時の土地所有者が宅地造成工事を行った際、石棺の天井石らしきものが発見されたために工事は中止となり、発見届が提出された。この時に発見された古墳が向山1号墳である。さらに、その後の分布調査によって隣接地に新たに方墳1基と前方後方墳推定地が1ヵ所発見され、合計3基のこれらの古墳は「向山古墳群」として松江市遺跡地図に記載されている。

平成5年度において、当該地に個人住宅を新築する計画がもちあがり、当教育委員会に平成6年2月3日付で遺跡分布調査の依頼を受けてこれを実施したところ、予定地は以前の造成工事によって一様に削平されており、古墳の墳丘の盛り土と思われるものは南側にわずかに残っているだけであった。また、以前に発見された石棺の天井石らしきものはその時には確認できなかった。

その後、依頼者との協議を行い工事との調整を図るため平成6年度において1号墳の規模、性格、構築時期を究明するため発掘調査を実施したものである。

II. 位置と歴史的環境

向山1号墳は、松江市街地の南東方向、大庭町の周囲が住宅地となっている山林中に所在する。標高は約20mである。

本古墳から見て南東方向には、標高171.5mの茶臼山がそびえ、さらにその南東には意宇平野の水田地帯がひろがっている。

周辺の縄文時代の遺跡としては、才塚遺跡、保地遺跡などが知られている。

弥生時代の後期後半の遺跡としては、来美墳墓（ 10×8 m）や間内越1号墓（ 8.8×6.67 m）のような四隅突出型墳丘墓が存在し、古墳時代直前の墳墓として貴重である。

古墳時代中期になると、井ノ奥4号墳（前方後円墳、57.5m）や石屋古墳（方墳、一辺40m）などの大型古墳がつぎつぎ築造されるようになる。この頃には大庭鷺塚古墳（方墳、一辺42m）や向山西2号墳（前方後方墳、長さ20m）が出現し、つづいて出雲地方最大規模の山代二子塚古墳（前方後方墳、長さ90m）山代方墳（石棺式石室、一辺45m）、永久宅後古墳（方墳か、石棺式石室）、東淵寺古墳（前方後円墳、長さ40m以上）、岡田山1号墳（前方後方墳、長さ20m、横穴式石室）岩屋後古墳（墳形、規模共に不明、石棺式石室）などが造られていく。又、それと前後して荒神谷・後谷古墳群（方墳16基、横穴20穴以上）などの群集墳や十王免横穴群（38穴）、孤谷横穴群（17穴）などの横穴墓が多数造られる。

奈良時代、平安時代の遺跡としては、出雲国府跡、出雲国山代郷正倉跡のような官衙跡や出雲国分寺跡、出雲国分尼寺跡、四王寺跡などの寺院跡がある。



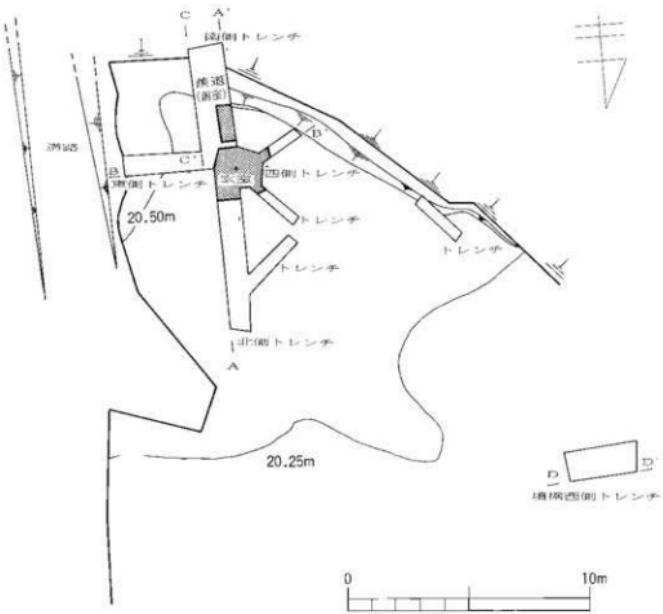
1. 向山1号墳 2. 向山西2号墳 3. 才塚遺跡 4. 保地遺跡 5. 来美墳墓 6. 間内越1号墓
 7. 井ノ奥4号墳 8. 石屋古墳 9. 大庭鶴塚古墳 10. 山代二子塚 11. 山代方墳 12. 永久宅後古墳
 13. 東瀬寺古墳 14. 岡田山1号墳 15. 岩屋後古墳 16. 荒神谷、後谷古墳群 17. 十王免横穴群
 18. 狐谷横穴群 19. 出雲国府跡 20. 出雲国山代郷正倉跡 21. 四王寺跡

第2図 周辺の遺跡分布図

III. 調査の概要

〈向山1号墳について〉

本墳の所在地は松江市大庭町1786-2番地で、東西方向の丘陵（最高所62m）の南向き緩斜面（標高約20m）に所在する。昭和45年発見当時の資料によれば前方後方墳と考えられていたが、調査前の現況から1辺約12mの方墳ではないかと推定された。墳丘の大半は発見当時の造成工事によって削平されたため築造当時の形態を留めてはいないが、南側において築造時期のものと考えられる盛土が僅かに残存しているのみであった。



第3図 発掘調査前地形測量図及び調査成果図

1) 墳丘について

墳丘の大半は重機によって削平を受けており、古墳築造当時の形状を留めておらず墳形・規模ともに不明であるが、北側及び西側に設定したトレンチの調査結果から推測すると方墳であると仮定して一辺30m以上級のものになると思われる。残存している盛土から考察すると、明褐色粘質土（地山によく似た土色・土質）と暗褐色粘質土を交互に積んだ版築状の非常に丁寧な墳丘構造が見受けられる。東・西・北側各トレンチの表土下約1.9mより人頭大の石がそれぞれ数個組み合わさった形で検出され、石室を支えるためのものと思われる。主体部北側の盛土には礫が混入しており、盛土の流出を防ぐ役割を果たしているものと考えられ、特筆すべき点として表土下約1.1mの暗褐色粘質土中より長さ30~60cm、厚さ10~20cmの山石が南北方向一直線にあって数個ほぼ同じレベルで並んで検出されているが用途については不明である。羨道（前室）部東側暗褐色粘質土中より子持壺2個が出土しております。羨道（前室）入口部から南側にかけて盛土の構築状況がやや雑になるよう思われる。

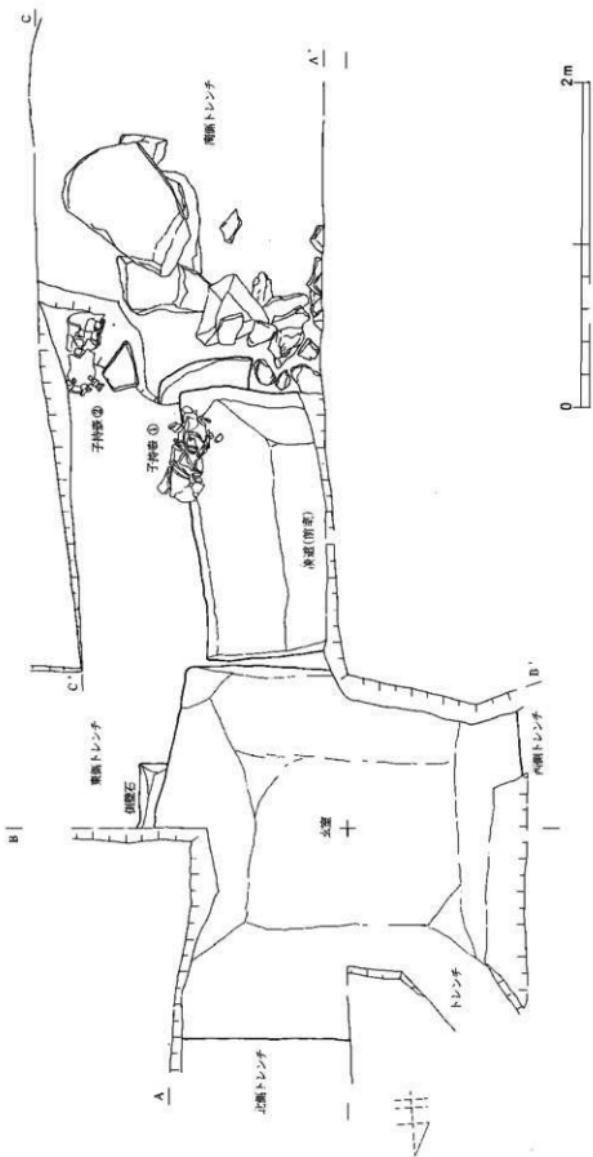
また、蓋石・埴輪は検出されなかったが、墳裾西側と思われる箇所表土下約20cmの暗褐色粘質土中より土師器、表土下約70cmの茶褐色粘質土中より須恵器がそれぞれ細片で出土しており、表土下約85~120cmにおいて地山に達する。

2) 主体部について

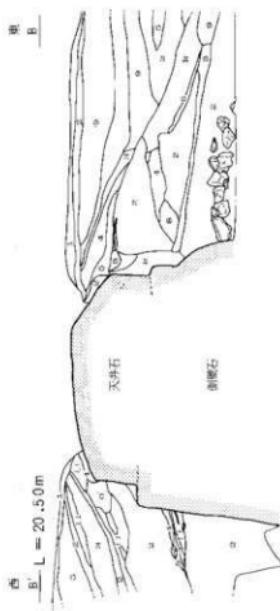
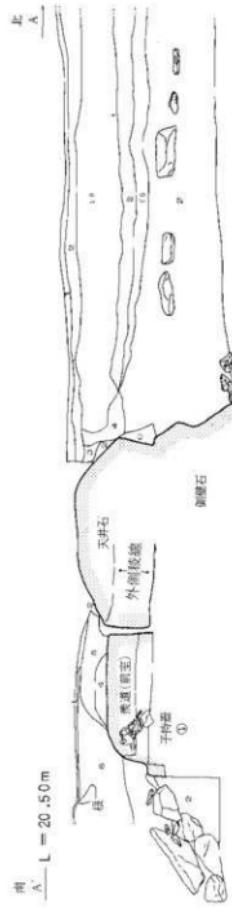
表土直下より出雲地方独特の埋葬施設である石棺式石室が複室構造状を呈するほぼ完全な形で確認された。主軸をほぼ南北にとって南側に入口を設けている。各壁、天井石とともに一枚の切石から構成されており、凝灰岩を使用しているものと思われる。南北（奥行）約2.3m、東西（幅）約2.2mではほぼ正方形の形をしている。天井石の厚さは約0.9mで、築造当初は屋根型に整形加工されていたと思われるが、重機によって天井石頂部が若干削平されている。天井石外面には縄掛突起らしきものは見受けられなかった。側壁は西側で長さ約1.8mと確認され、やや内傾している。天井石の間には粘土で目張りが施されている。

また、羨道（前室）は南北（奥行）約1.5m、天井石の厚さは約0.5mを測り、玄室と同様に屋根型に整形加工がなされている。羨道（前室）の羨門は多数の礫を詰めて閉塞してあり、土層断面より搅乱の痕跡もないよう思われることから未盗掘の可能性が強いものと推定する。

羨道（前室）南側より礫及び最大長さ約90cm、幅約60cmの山石が数個積み上げられた形で確認され、ここを覆う黒色粘質土より土師器・須恵器が出土しており、祭祀儀礼の供獻土器と考えれば前庭状の施設があったものと窺われる。



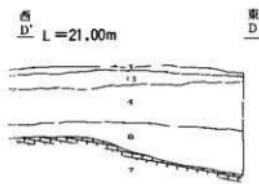
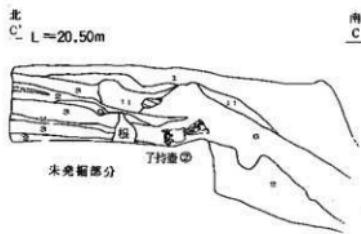
第4図 向山1号墳主体部平面図



1	老白粘土	7	明褐色粘质土(冲积)
2	老褐色粘土	8	老褐色粘质土
3	老黄色粘土	9	老褐色粘质土(褐色粘质土)
4	老黄色粘土(浅褐色粘质土层)	10	老褐色粘质土(深褐色)
5	老褐色粘质土(褐色粘质土层)	11	老褐色粘质土
6	老褐色粘质土		

4 m

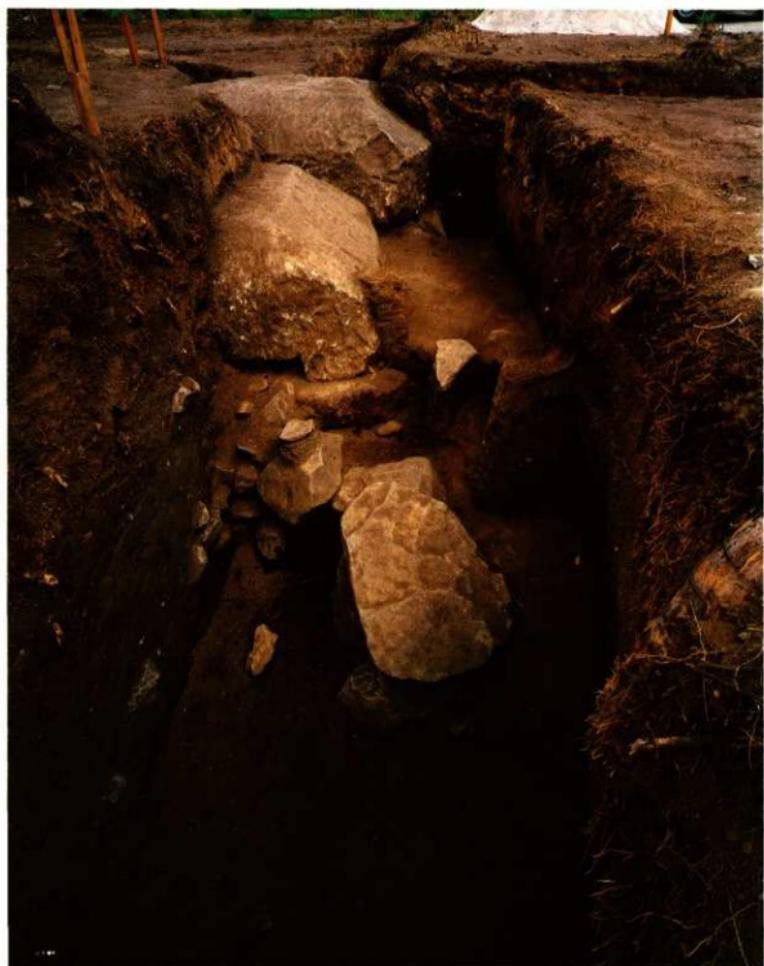
第5图 填丘土层断面图



1 黒色粘質土	7 明褐色粘質土(地山)
2 黒褐色粘質土	8 茶褐色粘質土(黑色粘質土混入)
3 明褐色粘質土	9 茶褐色粘質土(黑色粘質土混入)
4 黒色粘質土(明褐色粘質土混入)	10 茶褐色粘質土(黒色粘質土混入)
5 明褐色粘質土(黒色粘質土混入)	11 楊褐色粘質土
6 琉褐色粘質土	12 明褐色粘質土



第6図 南側トレンチ(上段)及び、墻裾西側トレンチ(下段)土層断面図



石棺式石室全景（南より）

3) 出土遺物について

No1は羨道（前室）東端上より出土。子持壺①（須恵器）のはば完形品である。推定口径17.0cm、高さ50.5cm、底径23.0cm。親壺は底部が存在せず、四方に円孔を穿ち、親壺肩部に底のある子壺4個を接合し、子壺底部と親壺肩部を同時に穿孔する。子壺は口縁、頸部、肩部を明確に区別できる。親壺と脚部の境には突帯を巡らしている。脚部は据広がりになっており、上半部に三角形状の透かし孔が2個あり、1条の沈線を有す。親壺は小型で脚部は長く据広がりになっているため均整のとれた形をしている。手法の特徴として、親壺外面は平行叩き後軽く回転ナデを施す。内面は回転ナデを施す。子壺は内外面ともに回転ナデ、親壺と子壺の接合部は静止ナデ、脚部外面は何らかの軽い工具による縦ナデ、内面は荒い回転ナデ、脚端部は内外面ともに横ナデがそれぞれ施されている。

No2は羨道（前室）東側より出土。子持壺②（須恵器）のはば完形品である。推定口径14.2cm、高さ50.8cm、底径21.6cm。親壺は底部が存在せず、三方に円孔を穿ち、親壺肩部に底のない子壺を接合し、刀子等の工具で子壺と親壺との接合部を穿孔する。子壺は推定口径7.7cm、高さ8.5cmで口縁、頸部、肩部を明確に区別できる。親壺と脚部の境は不明瞭で突帯はない。親壺は比較的に小さく脚部が長く据広がりの形態を擁するため均整のとれた形をしている。脚上半部に縦長長方形の透かし孔が3個あり、4条の沈線を有す。手法の特徴として親壺外面は孔より上部においてカキメ、下部において平行文叩きが施されている。内面は孔より上部において回転ナデ、下部において円弧状文當て具の痕跡があり、軽く横ナデが施されている。子壺については内外面とも回転ナデ、脚部外面は下から上方向へのカキメ、脚端部外面はナデつけ、脚部内面は斜め方向のナデがそれぞれ施されている。

No3、4は墳頂西側トレンチ、No3は暗褐色粘質土中より、No4は茶褐色粘質土中よりそれぞれ出土。No3は壺（須恵器）、No4は壺（土師器）のそれぞれ口縁部で、口縁端部は外傾する。

No5は南側トレンチより出土。壺（土師器）の口縁部である。口縁端部は外傾する。

No6～11は羨道（前室）入口部及び南側トレンチより出土。子壺（須恵器）の口縁部、肩部、胴部の破片である。口縁端部は外傾、肩部はよく張っており、鼈状の形態で内外面ともに回転ナデが施されている。

No12～14は羨道（前室）入口部及び西側より出土。親壺（須恵器）の口縁部、肩部である。口縁はやや外反するものと思われる。No12は外面に1条の沈線、No13は外面に1条の浅い段がそれぞれある。

No15～17は羨道（前室）東側及び南側トレンチより出土。親壺（須恵器）の脚部である。底径は20～22cmであり、外面はヘラ削り後脚端部において回転ナデ、内面は回転ナデ後脚端部においてナデが施されている。

No18～19は羨道（前室）入口部及び北側トレンチより出土。蓋杯（須恵器）の細片である。口縁部は内外面ともに回転ナデ、天井部において外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデが施されている。

No20は羨道（前室）入口部より出土。高杯（土師器）の脚部で、脚筒部内面にしづり痕がある。



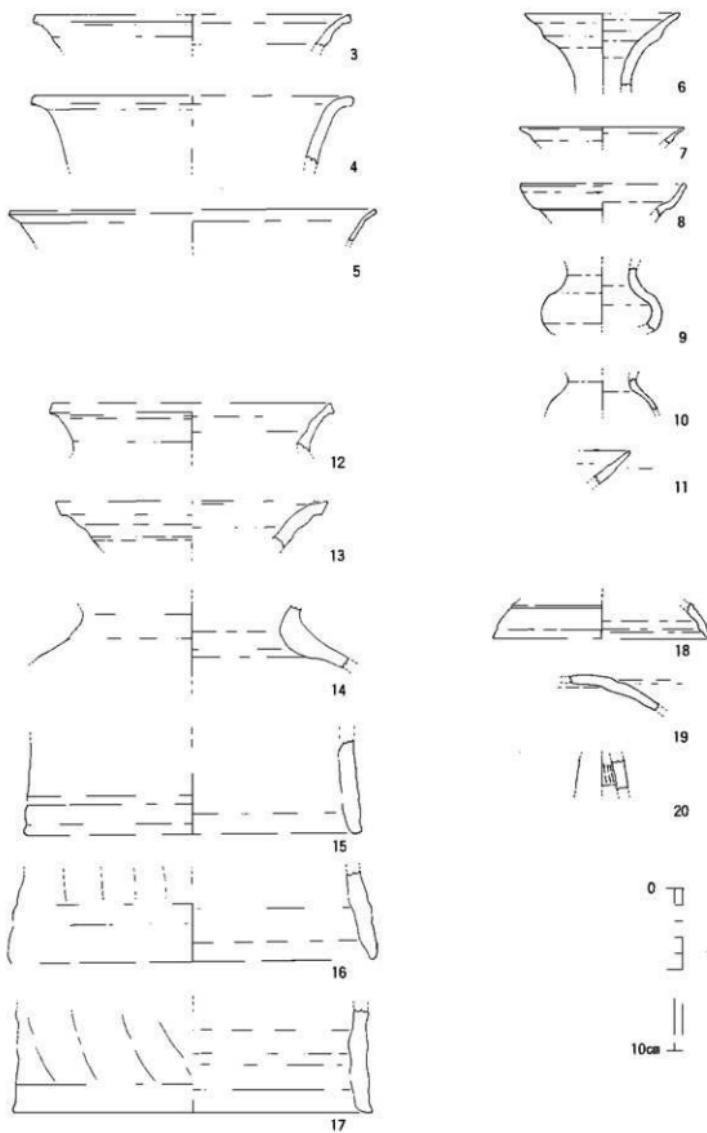
0 10cm

第7図 養道(前室)東端上出土子持壺(1:3)



0 10cm

第8図 群馬(前室)東側出土子持壺(1:3)



第9図 出土遺物 (1:3)

第1表 出土遺物一覧表

No	種類	器種	法量(cm)	形態・文様・手法の特徴	出土地点
1	須恵器	子持壺①	口径 17.0cm 高さ 50.5cm 底径 23.0cm	・親壺は四方に孔を穿つ ・親壺と脚部の境に突帯 ・脚部に一条の沈線 ・脚上半部に三角形の透かし	狭道(前室) 東端上
2	須恵器	子持壺②	口径 14.2cm 高さ 50.8cm 底径 21.6cm	・親壺は三方に孔を穿つ ・親壺と脚部の境が不明瞭 ・脚部に四条の沈線 ・脚上半部に四角形の透かし	狭道(前室) 東側
3	須恵器	壺	口径 19.2cm	口縁はやや外傾、内外面ともに回転ナデ	墳裾西側トレンチ
4	土師器	壺	口径 19.2cm	口縁は外反、内外面ともに回転ナデ	墳裾西側トレンチ
5	土師器	壺	口径 22.2cm	口縁はやや外傾、内外面ともに摩滅	南側トレンチ
6	須恵器	子壺	口径 9.6cm	口縁は外反する、内外面ともに回転ナデ	狭道(前室) 南側
7	須恵器	子壺	口径 10.0cm	口縁はやや外傾、外面は回転ナデ、内面は摩滅	狭道(前室) 入口部
8	須恵器	子壺	口径 10.2cm	口縁から頸基部にかけて一条の沈線あり、内外面ともに回転ナデ	狭道(前室) 入口部
9	須恵器	子壺		頸部から肩部にかけて残存、内外面ともに回転ナデ	狭道(前室) 入口部
10	須恵器	子壺		頸部及び肩一部残存、外面は摩滅、内面は回転ナデ	南側トレンチ
11	須恵器	子壺		内外面ともに回転ナデ	南側トレンチ
12	須恵器	親壺	口径 16.8cm	口縁部残存、1条の沈線内外面ともに回転ナデ	狭道(前室) 入口部
13	須恵器	親壺	口径 17.4cm	口縁部残存、1条の凸線あり、内外面ともに回転ナデ	狭道(前室) 入口部
14	須恵器	親壺		頸基部及び肩一部残存、内外面ともに摩滅	狭道(前室) 西側
15	須恵器	親壺	底径 20.2cm	外面はヘラ削り後脚端部回転ナデ、内面は回転ナデ後脚端部ナデ	狭道(前室) 東側
16	須恵器	親壺	底径 22.1cm	外面はヘラ削り後脚端部回転ナデ、内面は回転ナデ後脚端部ナデ	狭道(前室) 東側
17	須恵器	親壺	底径 22.0cm	外面はヘラ削り後脚端部回転ナデ、内面は摩滅	南部トレンチ

No	種類	器種	法量(cm)	形態・文様・手法の特徴	出土地点
18	須恵器	壺 蓋	口径 13.4cm	天井部と口縁部との境に沈線を持つ、内外面ともに回転ナデ	羨道（前室）入口部
19	須恵器	壺 蓋		天井一部残存、外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデ	北側トレンチ
20	土師器	高 壺		脚筒部内面にしづり痕あり	羨道（前室）入口部

IV. 結 び

調査の結果、向山1号墳は出雲地方独特の埋葬施設である石棺式石室を有することが判明した。この施設は島根、鳥取両県でこれまでに84例確認されているが、各壁が一枚の切石で構成されているものは旧出雲国内で24例、旧意宇郡内で11例、割り抜き玄門のものに限ると32例を数える。

本墳は墳形・規模については未だ不明であるが、北側及び墳頂西側トレンチの調査結果や本墳の周辺を取り巻く山代古墳群及び石棺式石室を持つ古墳の墳形・規模を参考にして推測すると、今のところ一辺30m以上の方墳系の古墳ではないかと想像する。また、版築状で礫を混ぜた盛土を使用した墳丘構造や石室を支えるために人頭大の山石を組み合わせて配していることから非常に丁寧な造りが見受けられる。本墳で確認された石棺式石室は、入口が南向きて、玄室平面形がほぼ正方形プランを呈し、複室構造を成していることから似たような特徴の石棺式石室を持つ山代方墳、永久宅後古墳や義道（前室）東側より出土した子持壺の年代観と合わせて考察するに本墳は6世紀後葉から7世紀前後にかけて築造されたものと推定される。談道（前室）南側より前庭状の遺構が確認され、土師器・須恵器等の遺物が出土しており、また墳頂西側と推定される箇所から土師器・須恵器がそれぞれ細片で出土していることから祭祀の行為がそれそれで行われた可能性がある。

本墳周辺には、東南の茶臼山方向に大庭鶴塚、山代二子塚、山代方墳、永久宅後古墳という島根県下でも最大級の大型古墳群があつて「山代・大庭古墳群」と呼ばれており、この「山代・大庭古墳群」から南へ1.5kmのところに「有古墳群」がありやはり石棺式石室を持つ团原古墳や岩屋後古墳が含まれている。

特筆すべき点として、本墳の石棺式石室は未盗掘の可能性が高く、石室内を調査することは本墳とこれら各古墳との時期的な関係や被葬者像が明らかになっていき、しいては出雲の古代史を解明する上で貴重な資料になるものと思われ、今後の調査に期待するものである。

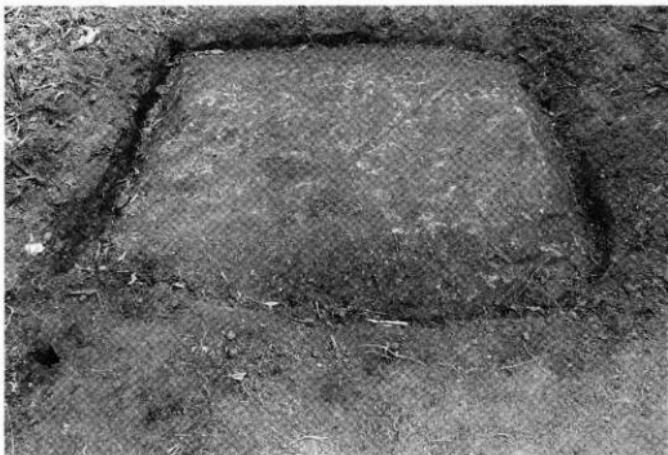
参考文献

1. 山本 清「須恵器より見たる出雲地方石棺式石室の時期について」『島根大学論集 人文科学』6号 1956年
2. ノウ「古墳の地域的特色とその交渉 一山陰の石棺式石室を中心として」『山陰文化研究紀要』第5号 1964年
3. 出雲考古学研究会「石棺式石室の研究」1987年10月
4. 角田雄幸「石棺式石室の系譜」『島根考古学会誌』第10集 1993年
5. 渡辺貞幸「松江市山代二子塚古墳をめぐる諸問題 — 测量調査の成果と今後の課題—」『山陰文化研究紀要』第23号 1983年
6. ノウ「岡田山1号墳研究の現状と問題点」『島根考古学会誌』1 1984年
7. ノウ「松江市山代方墳の諸問題」『山陰地域研究』第1号 1985年
8. ノウ「山代・大庭古墳群と五・六世紀の出雲」『山陰考古学の諸問題』 1986年
9. ノウ「出雲の古墳 — その特質 — 覚書」『古代の島根と南九州』島根県立八雲立つ風土記の丘資料館 1994年
10. 柳浦俊一「島根・鳥取県出土子持壺集成」『島根考古学会誌』第10集 1993年

図 版



図版1 向山1号墳調査前（北より）



図版2 石棺式石室天井石検出状況（東より）



図版3 天井石及び側壁検出状況（北より）



図版4 游道（前室）入口部（南より）



図版5 羨道（前室）東端上子持壺出土状況（東より）



図版6 羨道（前室）東側子持壺出土状況（西より）



図版7 西側トレンチ



図版8 前庭状造構検出状況



図版9　　墳掘西側トレンチ（東より）



図版10　　墳掘西側トレンチセクション（南より）



図版11　南側トレンチセクション（西より）



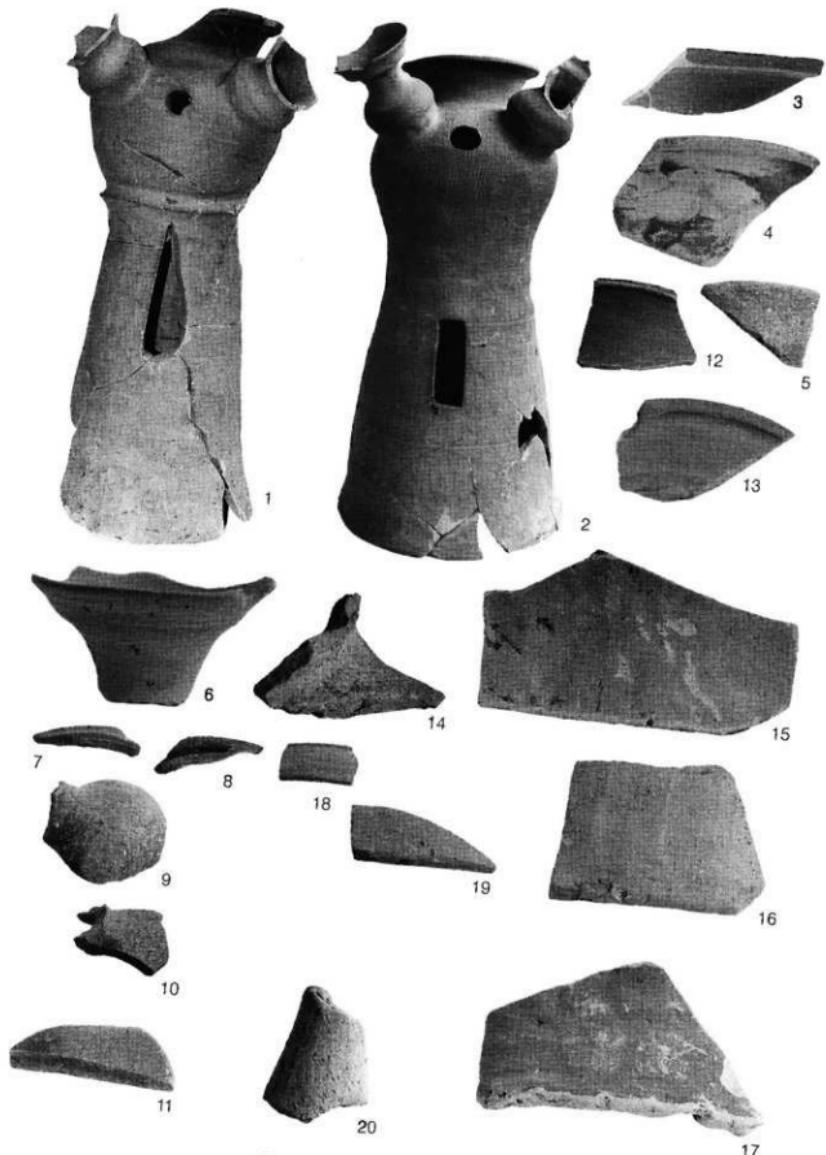
図版12　東側トレンチセクション（南より）



図版13 向山1号墳全景（北より）



図版14 埋め戻し完了（北より）



图版15 向山1号填出土遗物

向山1号墳発掘調査報告書Ⅰ

1995年3月

発行 松江市教育委員会

印刷 有限会社 谷口印刷
松江市母衣町89